慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十二年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

續記念號

（通第一〇一号）

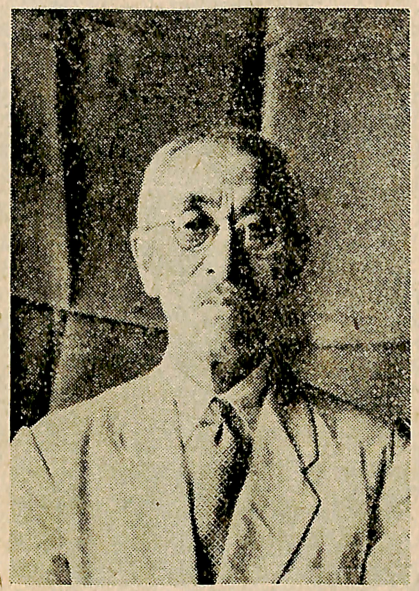
目次

大経五悪段講話……福島政雄…(1)
よきひと……榊原徳草…(4)
真宗俗諦門の妙趣……島　仁…(10)
不請の友……藤原慧皎…(12)
死の迫る日の手記……可説居士…(15)

第九卷　第八號

大経五悪段講話（四）

福島政雄



それに準じてその外のことも大抵そんなものでありまして、譬へば私が名誉欲、仏教で五欲と申しますと御承知の通り財・色・食・名・眠と申しまして、財産が欲しいといふ欲望、それから男女の欲、それから食べたい、飲みたいの欲、名誉欲、それから眠りたいといふ欲をいつてありますが、その四番目の名誉欲であります。これなんかも私はひどいのでありまして、これもお恥づかしいことでありますけれども、私が広島に居りました頃、学位論文など決して書かんぞと申して居りましたが、前にも申しましたでせう、決して書かんぞと申して居りましたが、それは私が、ペスタロッチといふ様な人のことを論文に書いてゐても、先生は見ては下さらんであらうといふひがんだ根性を持つて居りました。ところが或る御縁がありまして、先生が私にも論文を出しさうなものだと云つていらつしやるといふやうなことが解りまして、それから急に書く気になつて、急いで出しましたところが、それを非常によく取扱つて下さつて、提出してから半年ばかりの後に教授会を通過いたしました。さういふことがありまして、今度は学位を貰つて見ますと無性に喜んだものであります。

学位なんかはいらぬと云つて居たのが嘘であつて、いよいよ学位を貰つて見ますと、皆がこれを知つてくれさうなものをといふ、これであります……。実際その時のことを思ふと汗が出るやうでありますけれど、かねて懇意な人が自分の学位を貰つたことを知つてくれるだらうかといふやうなことばかりを考へて居りました。これは私自身が如何

に名誉欲のかたまりであるかといふことが、それ一つで分るのでありまして、どちらを向いてもそんなものである。名誉欲の強いといふことは、一方から云へば権力欲といふことになりますのでありまして、実際この五悪段の御目当は、この私であることになりますのであります。

まあ、さう云ふことで、五悪段といふものが、繰り返すごとに私の身に滲みこみますと同時に、釈尊をとほしての仏の御慈悲といふものが、又この身にしみて参りますといふやうなことでありまして、五悪段から味ひ始めましたところの大無量寿経といふものが、段々この上の巻といふものが解るやうになる手始めになりましたが、前に申し上げましたでせう、私の心が少し明るくなり始めましたのが、まあ五十歳越えた頃であります。それまで仏法のお話をしました時は、自分の煩悩の話ばかりをしたものであります。今でも煩悩の話が多いのでありますけれども、五十までの私は煩悩の話で持ちきりでありました。

そこへ五十を越えました頃からして親鸞聖人の御言葉でありますが『大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして、衆禍の波転ず』といふやうな、「行の巻」の御言葉と云ふものが、大分心に触れるやうになつて参りましたのであります。

そして五十三頃から改めて大無量寿経といふものをしんから味ひ始めたのであります。そしてすこうしづつ心が明るくなつて来る。自分で明るくしたわけではありませんけれども、つまり仏の智慧といふものが私に徹つて下さる。私はもと〳〵仏のお慈悲といふことで目を醒まして頂いたのであります。苦しんで〳〵、ぜいたくな苦しみをして居りまして、そして近角先生からこの仏の御力、御はたらきといふものは、慈悲と智慧とである。その智慧といふものは仲々わかりませんでした。

その仏の智慧といふものがすこうしわかり始めましたのが五十歳越えました頃からと思ひます。私が満洲に飛び出しました頃からすこしこの仏の智慧の光に照らされてゐるといふことに目がさめ始めました。仏の智慧の光といふものは私を照らして下さつてあるのでありますけれど、仏の智慧の光にめざめ始めたといふのが私の五十三、四の頃かと思ひます。

さうなつて参りますといふと、一方では益々自分のこの五悪の姿といふものが見えて来る、けれども、その智慧の光に照らされて参りますといふと、慈悲の力といふものが、同時にまた強く滲み渡つて来るといふやうなことでありまして、段々この今の自分が、名誉欲の塊であることや、自分は不孝の塊であるといふやうなことが、一つ一つ見えて参りますにつれて、その見えて来るのは仏の智慧に照らされて、すこうしづつ、自分の見えない目が見えて来るやうになつたのである、といふやうなことを感じるやうになつて参りました。

そして私は前からよく申します通りに、よくこの西洋の大きな小説を読んだものでありますが、たとへばロシヤのドストエフスキーの「カラマゾフ兄弟」を読んで見る。始めに読みましたのは三十四、五の頃であつたかと思ふので

あります。皆様お読みになつて居られますか。その「カラマゾフ兄弟」といふのは、そのフヨウドル・カラマゾフといふのが非常な仕様のない親爺でありまして、女に目のないといふ親爺であります。三人の男の子がある。その長男といふのが一方から云へば熱血男子でありますが、女に眼がない。長男とその親爺、親子で一人のグルーシャといふ女を争ふ。そして長男はドミトリーと申しますが、そのドミトリーは頻りに、親爺を殺す／＼と云つてゐるやうな有様であるといふことである。次男はまた非常にあんまり思想的に変な有様になつて居ります。三男のアリヨウシヤといふのは非常によい青年でありまして、本当にこの宗教の美しい面を現はしてゐるやうな青年であります。

さういふ小説をずうつと読みましたが、三十幾つで読みました時には、長男のドミトリーに私自身の姿を見るやうに感じて居りました。ところが今度はこの五十を越えて、六十近くなるやうになるにつれて、又読み返して考へて見るといひますと、私としても一番いやな人物、フヨウドル・カラマゾフといふ親爺であります。その親爺といふものが、私の姿を現はして居るんだと、これはその実際人前に出せる問題ぢやないのでありますけれども、さういふことを感ずるやうになりまして、あゝ自分と云ふものは、実はかういふものかと、感じるのであります。長男のドミトリーはまだ純なところがあります。親爺のフヨウドルは、これはもう、金を掴むといふことと、女を掴むといふことの、そればつかりの塊りで、そして何とも云へない嫌な奴であります。さあこれの姿に自分の姿を見ると、かういふ風に感じが変つて参りました。

あゝ自分といふものは何といふ姿であるかといふことになつて参りましたのであります。それでただフヨウドル・カラマゾフによつて自分の姿を見るとなつたらこれは絶体絶命となるのであります。立つても居てもゐられないのでありますけれども、さういふ自分といふものを飽迄も憐みますところの仏の慈悲、そしてまたさういふ姿であることを、私に眼を開いて下さつたところの仏の智慧といふものによつて、私がお慈悲にすがつて生きて参つて居ります。

そのフヨウドル・カラマゾフといふ人間はこれはまあ宗教の世界とまるで離れて居りまして、非常に立派な長老を自分でカラカツテ見たりいたしてゐるのであります。

私はしあはせなことには、二十六歳の時から、仏教といふ宗教に眼をさまして貰つてゐる。フヨウドルと同じ姿でありながら、自分の中心に通るところの仏の一心制意といふものがあるといふやうなことなのでありまして、それでどうやら息をついで居るといふのが、私の只今であります。だから只今の私といふものは二つから矛盾してゐる……その矛盾が仏様のまことのいのちによつて統一されてゐるとでもいふやうな有様であります。

よき人

榊原徳草

もの心がつくやうになつてから今日の年を重ねるまで私といふ者には常に落つきといふものがない。円の中心点が二つあるやうなもので、どうも私の中心といふものがあつてそこから四方八方に考へといひ行ひといひ言葉といひそれらが調子よく出てゆき、又そこにかへつてくるといふことがない。あつちへ出て行つた私が帰つてくるときには他の所へ坐つてしまふ、又そこから出直してみても、帰つてくる所が無くなつて、行つたきりになつたりする。それが困るのである。どうかして円応無方とか純粋に物ごとを押し進めて行くとか、帰る所が常に一定不変であつて不安といふものがなく、又行くとして可ならざるなしといふ自分になりたい。流通無碍の人間になりたい、さういふ願ひが止まなかつた私である。

私は常に愚痴の多い人間である。又孤独といふか、さみしい感情から離れ得ない人間であり、事実を正直に述べることが恥づかしく、四離滅裂の、まとまりのない性質である。これを仔細に述べ立てたならば恐ろしい人間が現れてくるのであつて、だからそれを逃避したり我を張つたりして勝利を得ることを望んだりすることになる。

だから私は真個の人間に遭つて、さういふつまらない私を、ゆるがない自分に造り上げたい、確固不動の精神を持つ人間になりたい。純粋にものごとを進めて行く人間になりたい。と思ふのであつた。

十五才の時だつたか、故郷の中学一年生のときに学校へその当時の文部大臣の一木喜徳郎氏が大勢の役人を引きつれて授業参観にやつてこられた。その時、大臣の眼の鋭かつたこと、射るやうな眼光に私はすくみ上つたことがあつた。今迄恐しかつた校長先生の眼など、それに比べれば何ともない眼だつた。

それから、家庭の転変で京都へ移り住み、禅宗の中学に転学してから、宗乗の先生、釈守愚老師の眼が又鋭かつたこのおかたは鋭いだけでなく、私を見ぬいてしまふ眼の怖しさだつた。

眼はその人の心を現はす、心の窓といふ。犬が主人を凝と見つめる眼は何と純な可愛い眼であろう、全心身をあげて、いのちをもつて、ひたむきに見つめる犬の眼ほど清らかなもの可愛いものはない。私は私の総てを挙げて犬のやうになつて見上げる、さういふひとにあひたかつた。

いろ〳〵の変化が私の人生に現れてくる、禅も少しはやつたが、これは少くとも釈守愚老師の人格の大きな感化によるので、今でも老師の御恩徳は謝し切れない、何かにつけて思ひ出され心を温めて下さるのは釈守愚老師である。臨済録の提唱を聴いたのも老師を通したからこそであると思つてゐる。得道の人の血肉を通して話される言葉、古聖賢の語録の提唱は、若い者の心に後半生への大切な生命の種子を播いてくれる。老師の御恩は謝しきれないものがある。

それから軍隊生活を二ヶ年送つたが、初年兵の時、中隊の初年兵掛りの築地純一少尉が教育の時間に——大抵雨天の日に教育といつて黒板に書いて精神訓話をして下さるのだが、或る時のこと「各階級ともに軍隊組織にあつては大切であつて、二等兵は一番下積みであつてもその上の土台になる大切な位であり、上に段々と積み上つて聯隊長までが全体となつて軍の精神と行動を発輝することができるのだ、」といふ話をされた。一番下の階級の私はそこで任務を果すことが責任であり、それが全体の中の決して価値の低いものでなく、階級は下でもその責任を自覚すればその階級に満足して精励される筈であるが、どうしても理解だけで自覚ができないのを苦しく思つたことであつた。この築地少尉は大変私を可愛がつてくれたがあるとき、五個の菓子を四人で平等に喰ふにはどうしたらよいかといふ質問をされた、先づ四個は四人で喰ふが残り一個をどうするか、と重ねて質問された、私等はその時二三人だつたが皆返答に困つていると、少尉は「その一つは食ふ者が食ふのだ」と云はれた。まるで禅問答であつたが、これがいつまでも問題になつてゐた。後年、夏目漱石の第二回大吐血後の「思ひ出すことなど」の中にある一つのリンゴを半分づつ喰べて行く譬をもつて人生の割り切れない問題を説明してある話で、これと同じことを知つた。この築地少尉は私が上等兵になれたら褒美を上げるといつて、砲兵学校へ転ぜられたが、私がなつたとき、その時の中隊附藤田見習士官に、ことづけてお祝と書き純一と署名して髭そりを下さつた。そして「上等兵になつたのだから、これで髭を綺麗にそつて、初年兵の時のやうに無精ひげを生やしてはいけない云々」と書いて下さつた。築地少尉の愛情には何かひかされる温いものがあつて今でも使つているひげそりをみるたびに思ひ出す。ほんとうにこれは軍隊生活の中で得られた「好き人」である。

兵役を終つてから臨済大学に入学し五年間学生々活を送つたが、学長の神月徹宗老師、左伝や春秋などを教へて下さつた陽明学者且つ禅の得道者である寺西乾山先生及び哲学の久松真一先生、禅宗学の日種譲山老師、又既に僧堂生活で見性して学生を再出発してゐる四年生の林古監君、など一目して人柄に別の風格があつて、羨望の的であつた。神月老師は毎年卒業式の時に涙を浮べて、どうか真の宗匠になつて頂きたいと訓話された。寺西先生を或る年の正月元旦に訪問したときお菓子を出して下さつて「容れ物は古いが、中味は新しいですよ」と微笑された時には頂門の一針であつた。又常に静かな久松先生はある時の講義に学問がいかに精緻を極めても悟りの世界には達し得ぬことを話されたときは、漸々と熱を帯び高い声を上げで、黒板に円をかきそれを円の中心点にだん〳〵丸く絞つてかきつつ、「永遠に近づくが永遠に達し得ないのです」と叫ぶやうに話され眼を輝かせたのであつた。

私はこのようにして、「好き人」に囲まれて少年から青年を送つた、まことに不可思議のこと、奇特のおそだてといふことを感ずるのである。何の幸せも悪くはないが、人格の勝れた方々に遭ひ、この眼で見、この感情に何がしかのうつろひを味ふことほど幸せなことはないと思ふ。だがこの「好き人」の感情はお念仏に遭うてから深くなつたのであつて、その当時は「羨望の人」として私にもどかしさを増す人々となつて表れてゐるのであつた。

それから種々の業の現れに遭つた、又その間に禅の行も試みた。禅は高嶺に咲く花で、その一輪の花を我がものにするには、自らの足で山坂を登らねばならない、私は相当これを試たつもりだが、禅宗寺院生活に母あり妻ある矛盾の現実生活が私の気の弱い乱れの性質から造られてゐることゝその矛盾に対する悩みも内に絶えない。そこへ劇しい私の人生の動転が起つた。結局は生きてゐることがいやになるところまで陥ちこんだのであつた。そんなときに不可思議の因縁によりお念仏の御縁を賜つたのである。

お念仏は、禅のやうに「こゝまでお出で、そしたら上げよう」といふ感じではなく、向ふから下りて私の前まできて下さつて、私の中へどうしたら這入れるかと、向ふで苦辛してゐるといふ生命に直接ふれてくる感じであつた。そして三十一才の十一月に、初めてお念仏一つに身も心も温められて、善知識の前に涙と共に念仏したのであつた。今まで出難くかつたお念仏が堰を切つたやうに朗々と唱へられた。身体中から汗が湧き流れ、固かつた身体が俄に一声々々の称名によつて柔かになつた。曾て釈守愚老師が御自分の見性の模様を話されたとき「毒血が頭のてつぺんから足のさきまで、シヤアー、シヤアー、と流れる音がきこえる」といつて鼻をうごめかせてフフンと笑はれたが、その姿とそのお話をフト思ひ出した。喉の奥に幾千万の仏達が

犇めき合ひ乍ら、われさきにと飛び出さうとして競ひあつてゐる。私の口外に飛び出す称名は、そんなわけで、満足には称へられない、二つも三つもお念仏が一時に飛び出すときはドモる外なかつた。臨済の「一喝」趙州の「無字」みなお念仏一つで片がついてしまつた。

それから念仏の魔に憑かれたやうに、走り廻つた。日本国中の人々にどうかして聞いてもらひたいと、慶喜に酔うて御縁に随つて走り廻つた。

又、仏の御手廻しが私を次ぎの場面に導いて下さつた。そこは池山栄吉先生の御前である。こんなお方が偉い念仏者かと疑つた。少しも有難さうな姿をして居られなかつた。最初の御法話の題「継母」のお話は、今でも何も覚えてゐない。会場の外に、先生が奥様と二人で茶色のレイン・コートを小脇に抱え、ステッキを持たれ、ハンチングを被られて自動車に乗られるのを見送つたが、何の感興も起らなかつた。それが、いつの間にか私には、唯一無二の無くてはならぬ「好き人」となつてしまつた。

十年間の慈育、そして御往生遊ばされた。お念仏と先生とは一つだつた。どつちを思ひ出しても同じである、又どちらを思ひ出しても付き添うてゐる。親鸞聖人とは、先生のやうなお方に違ひないと今でも思つてゐる。聖人に身感味肯させてくれたのは先生である。それは歎異抄、特に第二章の『親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられ参らすべし、と好き人の仰せかうむりて、信ずる外に別の仔細なきなり。』の一節、その中でも「好き人」といふ生きた語を身に感入せしめられ、いのちに点火して下さつたのは、「よき人」池山先生である。そして先生は講演の時にいつでも、こゝを口誦まれて『「親鸞におきては」とあるところを、池山と置き換へて、「池山におきては、只念仏して弥陀に助けられなさいよ」と仰つしやる、「よき人聖人」の仰せを被つて云々』と、片手で胸をおさえ、少し前かがみになつてやられるあの先生のお姿が、そのまゝ、親鸞聖人をして今日あらしめたる感が身に透つてくる。お念仏が自然に誦さまれてくる私である。そして、聖人と先師とは、お念仏が相即相入の姿となつて現れ給うてゐるとしか感ぜられない。歎異抄を生命の書として聖人に正受身感せしめて下さつたのは先師のお念仏であり先師のお蔭を蒙つたからである。好き人とは聖人であり先師であり、それに映え写されてくる好き人々は十指に余り、過去の数へることのできない程の仏菩薩方である。勿体ないが釈尊も最第一の私の好き人と呼ばせて頂かう。阿難尊者、韋提希夫人、達磨大師、白隠禅師、数へきれないほどの「好き人」が、お念仏一つの中に映えて顕れてくる。

歎異抄第二章の『親鸞におきては』に続いて……『何れ

の行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし』とある。あのやうになりたい、この自分の欠点を改めたいと私は私なりに内に思ひを凝らし外に励んでもみたが、何れの行も及び難く、且つ思ひもよらない業縁の現れに何もかも消え去つて生きてゐることさへ厭になつてしまふのだつたが、それでも「地獄は一定すみか」とは落つけない。

弥陀の本願まことにおはしますといふことが、お念仏一つに感じとられて、本願の念仏に心身共に落つけたら、駄目な私だつた、何れの行も及び難い身である、といふことが、お念仏に写り映えたのである。お念仏は決してこれからあれへと渡る橋ではない。地獄から極楽へ行くための護り符でもない。人生の山坂越える杖でもない。

『弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおはしまさば善導の御釈虚言したまふべからず、……親鸞がまをす旨またもて虚しかるべからす候か』とは、聖人が、好き人法然上人から面授口訣されたお念仏、『たゞ念仏して弥陀仏に助けられなさいよ』との仰せを南無阿弥陀仏々々々々々と頂いて、そのお念仏一つの中から、好き人々が常に妙法を説き弘められて次ぎから次ぎへと絶えることなく顕れ給ふありさまをお念仏のまことの姿として御覧になつて居られるやうに思はれるのである。お念仏に映へ出で、写り顕れる、「よき人々」とも味へるのである。

聖人は、しかしこの章の終りの方で『愚身の信心におきてはかくの如し』と仰せになる。聖人の『只念仏して』のお念仏一つに映え写り顕れ出で給ふよき人々と、も一つの感懐は『愚身の信心』である。『とても地獄は一定すみか』のお姿である。『何れの行もおよび難き身』の聖人である。『愚身』と云ひ『および難き身』と云ひ『すみか』と云ひ何といふ恐ろしき告白、真実の御言葉であらう。私は『身』といふ御言葉を聞くたびに恥ぢ入るのである。常々そんなに感じたことがないからである。精々「心」くらいにしか感じないのである。しかし聖人の『愚身の信心におきてはかくの如し』の御言葉を承ると、その御言葉に引かされて噫、聖人はたゞびとにはおはしまさぬ、権化のお方であると、ほれ〴〵と仰ぎまゐらす心が起つてくる。そして我身の愚さが底知れぬことに一時たりとも気づかせられる始末である。聖人は阿弥陀仏に釈尊に善導大師に法然上人に、渇仰の至情を表はされて、或は讃阿弥陀仏偈和讃、浄土和讃、高僧和讃と、御老齢の凡べてをかけられて混仰讃嘆の御心は止むときがなかつた。勿体ないけれども、これを私の言葉に直してみれば、阿弥陀仏から七祖に至るまで、これ皆、聖人に「好き人」として映え写り、親しく仰がずにに居られなかつたのではあるまいか。

試みに讃阿弥陀仏偈和讃の第一に、あの我等に親しみ深

い「弥陀成仏」の御讃仰がある。

弥陀成仏のこのかたは　いまに十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなく　世の盲冥をてらすなり。

この聖人の御讃嘆を拝すれば、おのづと阿弥陀如来が私ごとき瓦礫盲冥の者を照し出し救ひとつて下さるお姿が身に迫つてくるやうである。臨済録に「赤肉団上に一無位の真人あり、常に汝等諸人の面門より出入す、未だ証拠せざらん者は、看よ看よ」と慧照禅師は仰せられるが、同じことながら、私にはお念仏一つで親様に温められ安らはせて頂くより外にいのちにともしびはつかないやうに思ふのである。

このやうに阿弥陀仏は釈迦牟尼世尊に、又阿弥陀仏は善導大師に、法然上人に相即相入して顕現し給ふのではあるまいか。

法然上人を讃仰される聖人の御和讃に、

阿弥陀如来化してこそ　本師源空としめしけれ
化縁すでにつきぬれば　浄土にかへり給ひにき

何といふ聖人の御心持であらう。

法然上人は阿弥陀如来の御化身である。そして聖人を御導き下され御育て下さつて、御浮土へおかへりになつてしまはれたとの仰せである。好き人はそのまゝ如来上人である、如来さまの御化身が法然上人である。これは聖人の身に、その如くに実感信嘗されたまゝを述べられたのであつて、一毛のはいるすきもない。

「好き人」の体感がそれからそれへと浮ひ上つてくる。その元をたゞせは阿弥陀仏といふ親様に遭ふこと、遭うてゐること、これからもお浄土まで護つて頂くこと、こゝに始りこゝに連なつてゆくのである。一口に云へば南無阿弥陀仏で始まり又そこにつゞまるのである。

（終）

眞宗俗諦門の妙趣

島　仁

大経五悪段は真宗俗諦門の教の根拠であると云はれる。俗諦門と云へば、真宗では真諦門と並んで真俗二諦と云はれ或は二諦相依とも呼ばれて重要なる教の一つである。是即ち宗教的道徳であり宗教的信念から発する人倫道徳の教である。

真俗二諦の教法が世の所謂倫理道徳を超絶したるものなることは勿論であるが、其の俗諦門と云ふものに特に妙趣が存する。

而も此の俗諦門の教は普通道徳と同じく実行甚だ困難である。人或は云はん、真宗の俗諦は通常の倫理道徳とは其の趣きを異にするものである。通常の倫理道徳は宗教と離れたる倫理道徳であるから実行が出来ないが、真宗の俗諦は真諦より流れ出る所の道徳であるから真諦の信心が確かに決得せられてある上は、自然必然に実行せらるることであると。此は一理あることのやうなれども尚少しく注意を要する点がある。それは自然必然に行はることと有意作用によつて行はるる事との区別である。自然必然に行はる事には、教の必要は無い。教の必要あるは其の教により

て以て我等の有意作用を啓発せんが為である。故に真宗の俗諦の実行は自然必然に出来ることであれば真諦の教さへあれば別に俗諦の教は要らぬ筈である。然るに殆んど真諦と肩を並べたるが如くに俗諦が教へらるる以上は俗諦の実行は真諦の信心より自然必然に現はれ来るものではないことは明白である。真諦の信心により自然必然に獲る所は所謂現生十種の益である。此は自然必然に獲らるるものであるから、其に就いてあゝせよかうせよとか、ああせねばならぬかうせねばならぬとか云う教はない。冥衆の護持を願へとか、至徳の具足せんことを祈れとか云ふ様な教は一つもない。願はなくとも祈らなくとも自然必然に冥衆護持の益も獲られ、至徳具足の益も獲らるるからである。然るに真宗の俗諦は真諦と並んで厳然たる教として説かるる者であるから決して信心より自然必然に現はれ来る所の事を示したのでなくして我等の有意作用を啓発せんが為に存するものである事を知るべきである。さうして見れば、真宗俗諦の実行の困難は普通一般の倫理道徳の実行の困難と別段変りはないと云うて差支はない。即ち換言すれば真宗の俗

諦の完全なる実行は容易に出来ることではないと云はねばならぬ。

ここに於て真宗の俗諦と一般の道徳との区別をせなければならぬ。一般の道徳では他に我等が進歩すべき道がないので、何でも彼でも道徳的修行の一点張りで進まなければならぬからして、出来る出来ぬにかゝはらず一歩づゝでも実行せねばならぬと無理にでも決着することである。そこで決着はよけれども実際に至るときは、段々と不安に陥りて終には宗教に入るか或は人生の前途に絶望してしまふ様になる。然るに真宗の俗諦は、元来真諦と並び立つて居るのであるから前途の事は皆悉く真諦の方で成弁してある。故に最早俗諦の方に於て自身の進歩を求めねばならぬと云ふ必要は少しもない。特に其の実行については困難があつて、いくら勉めても、決して立派なことが出来る訳もなく且つ其実行の出来、不出来は人々の業報或は天賦の模様によることであつて業報或は天賦の劣等なる者は如何に努力するも到底勝れたることは出来ない次第である。故に真宗の俗諦の趣意は其の実行の方面に於て成功を求むるに非ずして、其の他の点に於て效力があるのである。兎も角、真宗の俗諦は其の実行が出来て、我等が立派な行ひをする様になるのを目的とするのではないのである。従つて立派な行ひを目的とする一般普通の道徳と、真宗の俗諦とは、大いにその趣きを異にするものである。言葉を換へて云へば立派な行ひをしようが劣悪なる行ひをしようが其はどちらでも構はない。真宗の俗諦の教は、そんな所を目的とするものではない。

然らば真宗の俗諦の目的は如何なる点にあるか。其の実行の出来難い事を感知せしむるのが目的である。此は既に真諦の信心を得たる者に対すると未だ信心を得ざる者に対するとの別はあれども、何れの場合にても、道徳的実行の出来難いことを感知せしむると云ふ点に於いては同一である。其に如何なる妙趣があるかと云はば、先づ未だ信心を得ざる者は道徳的実行の出来難きことを感知するよりして宗教に入り、信心を得る道に進む様になる。此は一寸見れば何でもない事の様なれども中々そうではない。他力の信仰に入る根本的障碍は、自力の修行が出来得る事の様に思ふことである。其の自力の修行と云ふ事は色々あれども、其の最も普通の事は我等の倫理道徳の行為である。此の道徳行為が立派に出来るものであると思うて居る間は到底他力の宗教には入ることが出来ぬ。然るに倫理道徳について真面目に実行を求むる時は其の結果は、終に倫理道徳の思ふ通りに行ひ得らるるものでない事を感知する様になるのが実に宗教に入る為の必須条件である。此の場合には畢竟自力の迷心を降伏するが主眼であるから、真宗俗諦の教でも、世間普通の倫理道徳の教でも、或は又五戒十善でも諸善万行でも、何でも差支はないがそれらの中真宗俗諦の教

は、直ちに真諦門を開示する組織になりてあるから最も好都合のものである。次に信心獲得以後の者には、如何なることになるかと云ふに、我等は他の信心により大安心を得たれども、尚習慣性となりて居る自力の迷心は断えず起り来りて止まないことである。そこで俗諦の教を聞かさるる時は丁度其の迷心に適当したる教であるから、直ちに之を実行せんとすることゝなる。然るに実行に掛りて見ると到底その出来難いことを感知するが為に、愈々無限大悲に対する感謝の念を深からしむるが目的である。然るに以上二つの場合の中、二諦相依の真味は第二の場合にあるのである。真諦の信心あるが為に、俗諦の実行の出来ざるに驚かず、俗諦の実行の出来ざるが為に弥々真諦の信心の有難味を感ずる所、実に相依相資の妙趣があり〳〵と感知せらるることである。

昭和三二、七、二〇、

不請の友

藤原慧皎

私が大谷大学予科二年生の頃……昭和七、八年であつたらうか。当時、京都においては、学生親鸞会が盛んに若い宗教的情熱を傾けて、信仰鼓吹の運動を続けてゐた。

或る夜、縁あつて、半分は不謹慎ながら、批判的な気分で、その会合に出かけて行つた私は、座談の席で、指導者の人から、

『君の金ボタンには親鸞の血が流れてゐるのだ』

と、学生服を摑んで、今にも薙ぎ倒されんばかりに、信仰薄き、横着な心を見抜いての叱咤激励にあつて、心底から、ただごとではないぞと奮いおこされた思い出がある。

それから十数年後、至らぬ信と愚痴の身でありながら、刑務教誨に職を奉じ、転々と北海道や、東京の刑務所を勤務し、戦後、名古屋へ来た時、教務課の人々が、月々花田さんから法話を伺ふ御縁のある事を聞いて、ゆくりなくも学生時代に、服をゆさぶつて泣かんばかりに法を説いて貰つた先生こそ、その花田さんであることを確認して、浅からざる御縁に感激したものであつた。

勿論先生は私を御存知なかつたが、私の胸の中には、先

生はまさによき人「請はざるの友」となつてゐて下さつたのである。

其後私は受刑者教誨といふ、大それた難事を続け、日毎に受刑者と共に、喜んだり、悲しんだり、更には腹を立てたり、愚痴つたり、煩悩の生活を繰り返し、教へては悔ひ、悔ひては誨ふる懺悔道を歩み続けてゐる、恥かしい事である。

或る篤信の保護司がしみ〴〵と述懐された事があつた。

『いくら世話をしても、裏切つて行く刑余者がある。たま〳〵成功してくれたと思つてゐると、途で行き会つても顔をそむけて行く。誠に更生保護の仕事は仏の布施の行といふべきかも知れぬ。感謝されるといふ報酬のない布施を地で行ふものだから』

と。その味ふべき尊い言葉の下から、こん〳〵と湧いて出るやうに、お念仏の声が保護司の口からほと走り出たものである。

矯正の仕事も、釈放者保護の仕事も、正しく経典にある「不請之友」の悲願であることを深く味はされた。

もう一つ。N君はつい一月程前に釈放になつたばかりなのに、早くも新入者として刑務所に入つて来た。

彼はさすがに釈放同日の犯行といふ不名誉を恥ぢてか、うつむき加減の頭をうなだれてゐた。前科数犯を累ねた男で、釈放時には折角、姉が出迎へてくれたのに、実家のしきゐが高いと独り合点をして、帰る途中の乗換駅で姉をまいて、ズラカリ、その足で再び空巣を仂いてしまつた。

然し悪銭身につかずで、早速検挙されて、刑務所に逆戻りしたと云ふ次第。して見やうのない無懺無愧の男にちがひない。

ところが、今度の家庭照会の回答を見ると、道楽息子のそんな不行跡にも拘らず、母は折角何年振りかで帰る息子にひがませてはならぬと、新しい布団を用意し、新しい着物を作つてゐたと云ふではないか。親の懐を逃げる蕩児に、どこ〳〵までも慈悲の手をのばして、母の心のやすまる時はない。これこそ、不請之友の誓願である。

斯様に毎日の仕事の中から、私自身に、生きた教を蒙つてゐるのである。

完。

編者註

『不請之友』……衆生の請求なきも、菩薩の大悲を以て我が為に友となりて利益するを云ふ。

△大経上、『諸の庶類の為に不請の友となり、群生を荷負して、これを重担とする。……大悲を興し、衆生を愍み

慈弁をのべ、法眼をさづけ、三悪趣をふさぎ、善趣の門を開き、不請の法を以て、諸の黎庶に施すこと、純孝の子の父母を愛敬するが如し。諸の衆生を視ること自己のごとくす……』

△勝鬘経。『普く衆生の為に、不請之友となり、大悲をもつて衆生を安慰し哀愍し、世の法母となる』。聖徳太子の註。「友は是れ相救ふを義となす。然るに請うて而して後に救ふは真の友に非ず、故に不請之友と云ふ。また菩薩の物（衆生）を化する、慈母の嬰児につくが如し。故に、世の法母となると云ふ」

△勝鬘経宝窟上末。「四乗の衆生根性ありと雖も、楽欲（求道心）いまだ生せず。故に請ひ求むる能はず。菩薩はその機を照し、その堪受を知り、即ちその者に応じて求めざるに法を説く。衆生これを聞いて必ず益を得るが故に、友となす」

△維摩経上。『衆人、不請の友としてこれを安んず』。聖徳太子註。「菩薩の慈悲は衆生の請ひを待たず、故に不請と言ふ。衆生を教化して同じく極果を証す、故に、友にして之を安んずと云ふ。肇法師の云ふ。真友は請を待たずして護ること、慈母の嬰児におもむくが如し……」

以上

楢山節考

増田辰治

息子が負ふ背板に乗りて山奥へ捨てられに行く老母
おりんは
鬼婆と人に歌はれ歯を折りて楢山様へ行くを楽しむ
白萩様（米の飯）椎茸ヤマメどぶろくが、山行前夜の振舞の馳走
粗衣粗食、保養もなさず仂きて老ゆれば山へ捨てらるるなり
山の掟無言の誓ひを堅く守りお山参りするおりん母子も
山谷を幾つか越えて池廻り人の通らめ道登りゆくお山参りの日に雪降れば後生よしと雪降り出すを喜ぶ母子
楢の木の繁る峠の岩に来ればあまたの髑髏と群がる鳥
農繁の疲れも忘れ老い吾の夜毎読み呆く楢山節考

短歌草原より

死の迫る日の手記

可説居士

無明長夜の燈炬なり　智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり　罪障重しと歎かざれ
弥陀の尊号となへつつ　信楽まことに得るひとは
憶念の心つねにして　仏恩報ずるおもひあり
如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も　骨を砕きても謝すべし

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。　合掌。

○

夫、人間の浮生なる相を、つら〳〵観ずるに、およそはかなきものは、この世の始中終、まぼろしの如くなる一期なり。さればいまだ萬歳の人身をうけたりといふことをきかず、一生すぎやすし、いまに至つて誰か百年の形体をたもつべきや。我やさき人やさき、きようともしらず、あすともしらず、おくれさきだつ人は、もとの雫・末の露よりもしげしといへり。されば朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなはちふたつのまなこたちまちに閉ぢ、ひとつのいきながく絶えぬれば、紅顔むなしく変じて桃李のよそおひを失ひぬる時は、六親・眷屬あつまりて歎き悲しめども更にその甲斐あるべからず。……」　白骨の御文。

○

是れほどにあだな世に、極めて不定なる死期を何時まで命ながらふべきとて、種々の活計を案じ、剰へ、他人の為に悪をたくみ思ひて、徒らに時を過すこと、極めて愚かな事なり。この道理真実なればこそ、仏もこれを衆生の為に説きたまひ、無常迅速、生死事大と申すなり。返す〳〵もこの道理を心に忘れずして、唯今日、今時ばかりと思うて、時を失はず、学道に心入るべきなり……。念々止まず、日々遷流して無常迅速なること、眼前の道理なり、……唯念々に明日を期することなく、当日当時ばかりを思うて、後日はただ不定にして知り難ければ。唯今日ばかり存命のほど仏道に随はんと思ふべきなり」　随聞記。

○

この白骨の御文と云ひ、随聞記と云ひ、これらの教誨は唯「諸行無常」「無常迅速」と云ふ事実を如実に知らせんとの御親切溢れるお言葉である。

或る経に「人間の生命は幾ばくの間なりや」との問に対して、唯一人「呼吸の間」と答へた沙門に対して、釈尊は「善哉、善哉」と讃辞を与へられたと云ふ。

「出る息、入るを待たず、入る息、出るを待たず」といはれる。これが我の生命であると教へられる。

私達は、一息、一息、生死巖頭に立ち、一念、一念、生死流転をくり返して居る。それだのに「人生五十年」と誰も、彼も云ふ。然しこの言葉ほど自己を欺き、自己の生命を知らぬ甚しい言葉はあるまい。ましてや人は死ねば誰でも仏になると言つて平気を装つて居る。何といふ悲しい私共の姿でせうか。

人間の生命が明日を待たず、一息一息の間にのみ限られた生きる喜びといふ真の生命感を、今に徹し、自己に徹し、一息の間に自己を直視するならば、真に無駄な人生。この尊い一息、一息の命を無駄に過して居る自己が知らされるであらう。

蓮如上人御一代聞書に

「仏法には世間のひまをかきて聞くべし。世間のひまをあけて法を聞くやうに思ふこと、浅間しきことなり。仏法には明日と云ふ事あるまじき由の仰に候」

とあり。歎異抄二章に

「おの〳〵十余ケ国の境を越えて身命をかへりみずして、尋ねきたらしめたまふ御こころざし、ひとへに往生極楽の道を問ひきかんがためなり云々」

とある。明日を待ち、後をたのみ、今を忘れて「不急の事を誇ふ」て「仏の教を聴き、心を貫して之を思ふ」ことも、なく、名利に、目前の享楽に迷惑して居る。このたるみきつた生活にくらべて、身命をかへりみず、身を捨てて往生浄土の道を尋ねられた私達先祖の歩んだ聞法の一道は、真剣そのものであつたでせう。

○

南無阿弥陀仏。
今朝「お早よう」と言葉を交した死刑囚は、昼に、人間

の言葉も絶えて白骨の人となる。それにしても、何と言ふ味気ない事だらうか。

「独生、独死、独去、独来」

と独り寂しく往かねばならぬこの世界。死刑確定者として、常に生死巌頭に立つて居ながら、生死を直視し、朝な夕な、死の影につきまとはれて居て、必ず来る、この執行の時を怖れつゝ待つ。この気持は他人事でなく、今更のやうに私も亦死刑確定者であつたと独白せずに居られない。

あの死刑囚も、この死刑囚も、次々と寂滅の煙と化し、その日から、この世から忘れ去られる。何人かの執行をこの耳で聞いた。又淋しく一冊の本が誰かを待つ如く机上に開かれてゐるのをこの目で見た。然しその囚友はもう二度とこの机に向ひ、この本を手にする事が出来ないと思ふと「今」私自身生死に処し、一息、一息の人生に生さてゐるのだと云ふ事を知らされる。

然しその思ひもすぐ消されて行く。何人かの執行者を見送り、又私もかうした時が来る事を知りつつ、何故か自分の事と思へず「今」に徹し、「自己」に徹することも出来ず、懈怠と放逸の日暮らし、三毒の煩悩に迷惑して、無駄な生命のもて遊びを続けてゐる。

○

「今」「自己」の死を、K君の執行を機縁として、御催促として省みたい。

「死」は常に他人事でなく「自己」の事であり、「今」である。それであるのに、自分の死を忘れ、今の一息々々の人生であり、一息の間しかないこの世間の名利に執着し、『不急のことを謂ひ』、出離生死の縁を求めようとしない。自己の死、今の死を忘れて日暮しをして居るといふ事は、とりもなほさず『自己の只今の生』を忘れてゐる事であります。

死の恐怖のみに心を執られ、死その事を直視しようとしない、ただ苦悩の渕に沈んで、暗い人生から、真の人生の目的、生死解脱の更生の大道に覚めようとしない、かうした徒な死の苦悶、それ自体が、すでに生の実態を無視して居ることでありませう。

死の恐怖、死に対する煩悶、それにのみ止つて、日夜転転とし、恐々として日を送る。人の靴音に、錠の音に、何か心のおののく生活、これが真の人間の生活、死に直面した人間の実態だらうか。

私は『否』と云ひたい。かうした煩悶を通して『今』の生を『自己』の生を直視する時『真の苦はここにあつたか』と叫びたい思ひがする。この『只今の自己の生』に、死の苦悩、狂乱の相、煩悶の相を含んだ生の実態を視るとき、今迄、死の苦しみ、悩み、悶へ、靴音を恐れ怖れたこの死苦は、その源が、生そのものにあつたかと知らされる。

私はこんな事を思ふ。『死は瞬間に決するが、しかし生はその死の決する瞬間まで一分一秒のたゆみもなく続く。だから本当の人生の苦とは、死苦そのものよりも生苦の方がくらべやうもない程深刻であり重大である』と。

私共が日々に感じ、夜々に思ふ苦悩は浮調子なものである、それよりも、さうした一切の憂悲苦悩を含む、自己の只今の生苦、その、救済こそ大切な問題である。

世間の人々は、死刑囚の者は、苦しみ、悶え、悩み抜いて悟りをひらき、安心して静かに死んで行けるだらうと言つたり、思つたりするかも知れないが、仲々さうはいかぬ。我々の同囚者ではたして何人が悟りを得て死に就いたであらうか。

それといふのも、自己の只今の生、といふことが仲々問題にならないで、枝末のことにばかり心が走り廻る。不治の病人や、老病者が、やがて死ぬると云つても、只今の自己の問題とは仲々なれぬ。そのやうに死刑確定者も、やがて、程なく執行されるとは思ふが『今の私』とならない。従つて『生死出離の道』を求める心が発起されない。尊い生命を空費して、ぐす〳〵したまんま、真実の生の喜びもしらずに終る。

死刑者の真の苦悩や煩悶は、執行の言渡しから始ると思ふ。これが人生最大の、最初で最後の苦であります。

私は今この言葉を誌しながら、真に生きようとするその意欲を一息一息の間に泌み〳〵と感じます。私は死んではならないのです。畢竟生き抜かねばならないのです。一息一息の中に自己を見、平生業成の御恵を被り、永遠の生を頂くのです。浄土に往いて生れ、倶会一処するのです。

然しこれは私が賢くて聞いたのでなく、又私が聞かうとして聞けたのでもありません。南無阿弥陀仏のみ声は、私の心のはからひを待たず『来いよ、来いよ』と呼びづめに喚び続けて下さつてゐるみ声が到りとどいて下さつたのです。一般の人々も仲々聞けぬやうに、死刑囚はなほ更に聞けないのです。私は只不可思議の御仏縁を謝しまつるばかりであります。

絶句

善き人を、訪ひ、問ひ登る不二の山。

昭和三十二年、四月四日。

四月二十六日
刑死

編集後記

残暑御見舞申し上げます。病中欠礼、悪しからず。但し狭心症発作も遠のき不整脉もおさまり、順調に静養して居ります、何卒御休心願ひます。

○

去る日、喜寿の祝を迎へられた島根県の三瓶徳英老師、山口県を旅せられて突然の御来庵、当日取りこみ中とて電光石火の御面接。次いで東京に行かれ、卅日の白井先生の講話日に再び来訪下さる。かねてから山口県の松村繁雄氏から「今良寛さんです」と紹介うけし通り、童顔飄々。御一泊下され、種々の金言をたまはる。

○

白井先生は「世を越えしむるおもむき」の題で、御話し下さいました。聴き得ぬ私のため御見舞を蒙る。

○

本号も引き続き続記念号といたしました。福島先生の御近影を頂き、御姿を通してお面接願ひます。御住所は、東京都調布市仙川町七九四。

○

「よきひと」の榊原徳草さんの原稿は全生涯を通じての仏陀善巧の有様をとかれました。京都市右京区山田開町浄住寺に住居せられる。

○

「俗諦門の妙趣」は、京都の学生時代の信友。只今は、福岡県山門郡大和町島、仁業寺住、島仁師から頂く。

○

「不請之友」の藤原慧皎さんは、島さんと同時代、学友であります。只今、名刑分類部長。

○

可説居士の最後の手記を提げ、謹みて吊しました。

御案内

日曜講話。第二、第三日曜午后一時半。一道会館。但し九月のみ。市電、新郊通一丁目下車、東一丁。

○

十月からは第一、二、三と講話の予定であります。

定価 一部 十七円（送共）
半年 百円（送共）
一年 二百円（送共）
名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集・発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 本田政雄
名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光 第九巻第八号昭和三十二年八月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可